

「舊南海獻龍眼荔支。十里一置、五里一候」とあり、同様の内容を記して同條所引謝承の後漢書には「唐羌字伯游、辟公府補臨武長縣（縣長の誤）、接交州、舊獻龍眼荔支及生鮮、獻之驛馬。暮夜傳送之」と見えるから、置は驛であると論斷されたのである（前掲論文参照）。

置亭に對する私見は本文に述べる通りであり、之は次例の置驛（本文中に掲載、青山氏はこの記事に注意されて居らぬ）とも併せ考察すべきであらうと思はれるが、茲では同氏の論據を消極的に反駁して置かう。私見によれば和帝紀の記事は十里に一郵を設けたいといふ風に解して支障ないやうである。但しあく設置された郵には人は言ふ迄もなく馬も（或は車も）用意されて居たと看做すべきであらう。何故ならば三輔黃圖卷三に、謝承書と同様のことを記して、「扶荔宮在上林苑中。漢武帝元鼎六年、破南越起扶荔宮、以植所得奇草異木。（中略）荔枝自交趾移植百株于庭、無一生者。連年猶移植不息、後數歲偶一株稍茂、終無華實。帝亦珍惜之。一旦萎死、吏坐誅者數十人、遂不復蒔矣。其質則歲貢焉。郵傳者疲斃於道、極

置の内容は既述の如く複雑なものであつたのであらう。因に又青山氏は金石萃編卷一八漢條、鄧陽令曹全碑（靈帝中平二年所造）に、「惠政之流、甚於置郵。百姓総負反者如雲」とあるのを引用され、之をも驛郵と解されたが、同様の例は隸釋卷十所錄の安平相孫根碑（靈帝光和中建立）にも、「德澤流征、速於置郵」と見られるのであつて、思ふに此等は孟子公孫丑章句上に「孔子曰、德之流行、速於置郵而傳命」とあるのに由來するものであらう。之は孔孟時代に於ける驛制にまで及ぶ問題で素より明白にはなしがたく、従つて置郵を直ちに漢代の驛郵と解釋すべき確鑿に乏しいであらう。

又青山氏は金石萃編卷一八漢條、鄧陽令曹全碑（靈帝中平二年所造）に、「惠政之流、甚於置郵。百姓総負反者如雲」とあるのを引用され、之をも驛郵と解されたが、同様の例は隸釋卷十所錄の安平相孫根碑（靈帝光和中建立）にも、「德澤流征、速於置郵」と見られるのであつて、思ふに此等は孟子公孫丑章句上に「孔子曰、德之流行、速於置郵而傳命」とあるのに由來するものであらう。之は孔孟時代に於ける驛制にまで及ぶ問題で素より明白にはなしがたく、従つて置郵を直ちに漢代の驛郵と解釋すべき確鑿に乏しいであらう。

紹介及び批評

レーヴィンタール氏等編
「支那に於ける宗教期刊」

榎 一 雄

が、今回陳鴻舜・古廷昌・梁允彝氏等の助力を得て
それらを集成補訂し、上記の如き題名で刊行した。
その内容は次の如くである。

第一篇、支那に於けるミッション＝プレス（一一

一三二頁）

Rudolf Löwenthal & Others; The Religious
Periodical Press in China. Peking, 1940, pp.

VI+294, With 7 maps and 16 charts [The
Synodal Commission in China, Sinological
Series, No. 57]

（古廷昌）

一、支那に於けるカトリックの定期刊行物（レ
ーヴィンタール）

二、滿洲に於けるカトリックの定期刊行物（レ
ーヴィンタール）

三、支那に於けるプロテスタントの定期刊行物

（古廷昌）

燕京大學のレーヴィンタール氏は一九三六年以來、
支那に於けるカトリック及びプロテスタントの定期
刊行物を始め、佛教・孔教・回教・猶太人・ロシア正
教の定期刊行物を調査し、種々な形で發表して來た

四、佛教定期刊行物（レーヴィンタール・梁允
彝共編）

五、道教定期刊行物（陳鴻舜）

六、孔教定期刊行物（レーヴェンタール）

第三篇、其他の小宗教團體の刊行物（二〇九—

二七六頁）

七、回教定期刊行物（レーヴェンタール）

八、猶太教關係定期刊行物（レーヴェンタール）

九、支那に於けるロシア正教及びその他のキリ

スト教團體のロシア文定期刊行物

要約と結び（二七七—二九四頁）

支那に於ける宗教期刊（レーヴェンタール）

この中、猶太教關係のものの中には必ずしも宗教的
と認め難いものもあるが、他は何れも所謂 Religious Press である。

本書は「支那に於ける宗教的定期刊行物」と題してあるけれども、所謂支那の中には滿洲國を含せており、外地に於いて發行せられてゐる場合でもそれが支那人に讀せるためのものであれば著錄してゐる

る。これに據ると、一九三九年現在までに發行せられた定期刊行物は一千九十三種、中廢刊したもののが五百三十一種、現在刊行中のもの五百六十二種の多さに上り、これを各宗派別に表示すれば次の如くになる。

| 宗 教 | 流 行 | 現在發行數 | | | 廢 刊 | 合 計 |
|-----------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|
| | | 道 | 佛 | 羅 | | |
| 羅馬ニカラトリック | | 一五三 | | | | |
| プロテスチント | | 二五九 | | | | |
| 猶 太 教 | 二 四 | 一 八 | 二 六 | 一 五 | 九一 | 三 九 |
| 羅シア正教 | 四 四 | 一 七 | 二 九 | 二 三 | 九一 | 四 一 |
| 其の他のキリスト教 | 三 九 | 一 九 | 五 九 | 一 九 | 二 一 | 一〇〇 |
| | | 二 三 | 三 六 | 一〇〇 | | |
| | 七 | | | | | |

本書はこれら一千九十三種の刊行物を或は團體別に、或は言語別に、或は地方別に、或は年代別に、或は日刊、週刊、月刊等發行形式や體裁別に分類し、その沿革を記し、現況を述べ、無數の表を用ひて調査の結果を一目に瞭然たらしめて居る。今その詳細はすべ

て省略に従はなければならぬ。されば、蓋しんの方面に於ける最も完全した調査であつて、現代支那の文化の一侧面を窺ふに必要缺くべからざる良書であると思はれる。

ノーゲル・ンタール氏編

支那に於ける猶太人

榎 一 雄

Vol. 1, No. 2, 1939, pp. 256-291)。心題する力作を發表したが、今回これを増補して各書に解題を附し、序論・附錄・索引をつけて公にした。收載の文籍凡そ一百五十八、前著に著録する所一百四十五であるに比すると、その數に於いて殆んど一倍に近くなつてゐる。

序論 (pp. 113-126) は、先づ開封府の猶太人部落が一六〇五年マテオニリッチの知る所となつて以來、

Rudolf Löwenthal; Jews in China (The Chinese Social and Political Science Review, Vol. XXIV, July-September, 1940, No. 2. pp. 113-234)

十九世紀の末年に至るまで絶えず世人の注目的になつてゐた事實を述べ、次に猶太人が始めて支那に入つた年代に關する諸家の説を紹介し、更に開封府在住及び十九—二十世紀に支那に流入した猶太人の口數、それに關する各書所掲の統計表と猶太移民の生活状況を概観し、支那に於いて猶太人を呼ぶ各種の名稱を記し、最後に支那人の猶太人に對する態度が極めて公平寛大である事實を指摘して筆を擱じてゐる。

ノーゲル・ンタール氏は前に「支那に於ける猶太人」と翻訳する「支那の猶太人」 ("The Jews in China; A Bibliography," The Yenching Journal of Social Studies,